

Ⅳ 「東国仏教の伝播を探る

—— 瓦塔が投げかけたもの ——

金井塚良一

埼玉からまいりました金井塚でございます。私は、平安時代初期の東国仏教の隆盛を示す一つのエピソードを紹介させていただきます。その辺のところから、私の問題に入らせていただきます。

私も、いくつかの資料を用意しました。最初に、「慈光寺略年表」というのがございます。慈光寺は、埼玉県に現存するお寺で、埼玉県では、最も古い古刹の一つであります。この慈光寺は、伝教大師——最澄と、大変関係の深かった、道忠によって創始されたといわれております。資料の上の段の方は、『慈光寺縁起』から摘出したものですから、これは少々問題があるかもしれませんが、参考にしていただきたいと思います。下の方には『続日本記』・『元享釈書』など、いろんな資料から取りました、東国の仏教にかかわりのあるいくつかの項目を、だいたい、奈良時代から平安時代の初めごろまで出しておきました。今まで、桐原先生はじめ御三人の方から、いろんなお話がありましたが、その時期を、この年表にあてはめていただければ、その背景が、ある程度おわかりいただけると思います。たとえば、桐原先生も、森先生も菖蒲沢から出土した瓦塔を、最古の瓦塔と申されております。そして、奈良時代末——8世紀の第3四半期とおっしゃっていたんですが、その第3四半期には、慈光寺の縁起では、慈光寺が創建されたことになっております。そして、さらに下の方を見ていただきますと、第2代の天台座主円澄が、埼玉に生まれております。あの天台の法燈、最澄の教義を継承して、天台仏教の基礎を創ったといわれる第2代天台座主は、実は、埼玉県の出身でございます。まさに、この瓦塔が造られたころ、埼玉県で呱呱の声をあげたわけですね。一つずつ申しあげませんが、こんなふうに年表をたどっていただきますと、菖蒲沢の遺物や、遺構とかかわりのある時期——歴史の背景みたいなものを、具体的に推測する事例が見つかるんじゃないかと思えます。参考にしていただけたらと思います。

次の資料は、私は、エピソードを申しあげるといいましたが、実はそれと関連するものなんです。最澄——伝教大師が東国に東下した年が、弘仁8年でございました。今から1172年前でございますが、そのころ、埼玉県の東山遺跡の瓦塔が造られたんじゃないかと考えます。これも、森先生の資料の中にも紹介されておりましたが、東国の仏教文化の土壌、温床を理解する具体的な事例として、頭に入れておいていただきたいと思います。

私は、東国に仏教が伝播し、そして信仰されたのは、決して、天平13年——741年の武蔵国分



『埼玉県古代寺院調査報告書』の中にまとめられている資料でございます。ここでは、瓦の資料を主にして、埼玉県の古代寺院を、第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期、第Ⅳ期と分けております。第Ⅰ期

— 108 —

は埼玉県の寺谷廃寺から出土しました——飛鳥寺様式の瓦当でございまして、これが、今のところ埼玉で、あるいは東国でも、最も古い瓦当と考えていいでしょう。私は、こういった瓦当も参考にしてすでに推古朝の初期——西暦600年前後には、東国に仏教が伝播していた、そして、7世紀前半には、お寺が造られていた。そういうことを具体的に主張する根拠にしているわけです。この時期が7世紀の前半、もしくは中葉前後と考えていいと思います。その次、第Ⅱ期ですが、ここからは8世紀に入ります。8世紀の第Ⅰ四半期でございます。第Ⅲ期は8世紀の第Ⅱ四半期から第Ⅲ四半期、その辺で把握していいと思います。その次の第Ⅳ期ですが、細かくいえば、A・Bと二時期にわけられていますが、これを8世紀の末から、9世紀の前半——奈良時代の末から、平安の初めというふうに考えておいていただきたいと思います。第Ⅴ期ですが、これもやはり、A・Bとわけられますが、この時期が9世紀の後半から10世紀の初め、平安時代の前半というふ

慈光寺略年表（『慈光寺』新人物往来社刊より）

年号	西暦	寺伝・概説等	文獻・記録・金石文等	開通事項
天智九 （安武）	六七〇	慈光寺、慈光山に建ち、寺地の縁を授けられ、寺日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武九 （安武）	六七三	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武一〇 （安武）	六七六	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武一一 （安武）	六七七	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武一二 （安武）	六七八	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武一三 （安武）	六七九	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武一四 （安武）	七八〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武一五 （安武）	七八一	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武一六 （安武）	七八二	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武一七 （安武）	七八三	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武一八 （安武）	七八四	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武一九 （安武）	七八五	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武二〇 （安武）	七八六	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武二一 （安武）	七八七	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武二二 （安武）	七八八	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武二三 （安武）	七八九	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武二四 （安武）	七九〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武二五 （安武）	七九一	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武二六 （安武）	七九二	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武二七 （安武）	七九三	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武二八 （安武）	七九四	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武二九 （安武）	七九五	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武三〇 （安武）	七九六	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武三一 （安武）	七九七	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武三二 （安武）	七九八	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武三三 （安武）	七九九	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武三四 （安武）	八〇〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武三五 （安武）	八〇一	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武三六 （安武）	八〇二	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武三七 （安武）	八〇三	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武三八 （安武）	八〇四	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武三九 （安武）	八〇五	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武四〇 （安武）	八〇六	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武四一 （安武）	八〇七	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武四二 （安武）	八〇八	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武四三 （安武）	八〇九	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武四四 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武四五 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武四六 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武四七 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武四八 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武四九 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武五〇 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武五一 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武五二 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武五三 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武五四 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武五五 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武五六 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武五七 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武五八 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武五九 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武六〇 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武六一 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武六二 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武六三 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武六四 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武六五 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武六六 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武六七 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武六八 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武六九 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武七〇 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武七一 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武七二 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武七三 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武七四 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武七五 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武七六 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武七七 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武七八 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武七九 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武八〇 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武八一 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武八二 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武八三 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武八四 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武八五 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武八六 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武八七 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武八八 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武八九 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武九〇 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武九一 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武九二 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武九三 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武九四 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武九五 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武九六 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武九七 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武九八 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武九九 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		
天武一〇〇 （安武）	八一〇	日老法師より授けられた千手観音を祀る（実録）		

うに考えていただきたいと思います。まあV期というのは、直接問題にならないだろうと思います。こんなふうに現在私共は、出土した瓦を中心にして、その瓦と関係のある廃寺の時期を区分しているんですが、そういう成果をもとにして考えますと、繰り返しになりますが、埼玉県では、7世紀前半には、すでに飛鳥寺に使用された瓦と同様な瓦を出土する、古い寺院が造られていた。そして7世紀後半にはさかんに造寺活動が展開され、奈良時代、国分寺創建以前に、かなりの数のお寺が造られていた。そういった、意外に早い仏教興隆の事実が十分考えられてくるのであります。

さて、先程申しあげました、エピソードでございしますが、今をさる1172年前、嵯峨天皇の弘仁8年といえますから、西暦で申しますと817年でございします。この年に天台の開祖、最澄、すなわち伝教大師が、義真、円澄、円仁といった弟子——最澄を助け、天台仏教の基礎を築いた門弟たちを連れて、東下してまいりました。おそらく一行は、塩尻辺りを通ったに違いありません。あるいはそこから小県を抜けて、佐久から上野へ入ったのでしょう。私はこの、最澄を中心にして、後の天台座主になったような人達が東下しました、いわゆる最澄の東国旅行は、おそらく、最澄教団、天台教団があげて計画した、大旅行であったと考えていいと思っております。その最澄の一行は、初めに東山道を通して、下野に行きました。下野の大慈寺というお寺に到着いたします。ここには広智というお坊さんがいました。それ以前、東国では、鑑真和上の最高の弟子といわれ、「授戒第一」と称された道忠という人が活躍しておりました。広智はこの道忠のもとで修業した、道忠の第一の高弟でございします。そして、この広智のもとで、円仁、後の慈覚大師が育てられ、広智の紹介で叡山に登って、最澄から教えを受けたのであります。埼玉県の行田市に、埼玉古墳群があります。その辺りで円澄が、先程申しあげましたように、菖蒲沢の瓦塔のころ、産声をあげました。そして円澄は、道忠のもとでも教育され、さらに道忠の推輓で、やはり叡山に登っております。まあ年表を見ていただければわかるんですが、円澄の方が円仁より少し早く、叡山に登っておるようです。そのころ、神奈川——相模から出て、天台宗の初代の座主になった義真という人も、最澄のもとで修業しております。最澄はこういった東国出身の高弟——義真、円澄、円仁、そして徳弁、そういった人たちを連れて、弘仁8年に、東山道を通して、塩尻、おそらく松本平を通して東国へやってきたのであります。そして、最澄一行は、大慈寺で最初に講筵を開きます。『元享釈書』によりますと、この説教に集まった民衆は、4万人にのぼったといわれております。その後、大慈寺からさらに上野にまいりまして、上野の緑野寺、今の鬼石町の浄法寺、この鬼石町は、山一つ越えればもう佐久でございします。その鬼石町の緑野寺というお寺で、やはり講筵を開きます。ある書物によりますと、この時、9万人の民衆が集まって、そして菩薩、生き仏——最澄のお話を聞いたといわれています。しかも、この講演は、3ヶ月間続き、その終わりに、最澄によって、荘厳な授戒会が行われたんです。坊さんだけでなく、一般の志のある人にも、授戒がおこなわれました。仏になることが許されたんです。参集した大勢の人たちが咳一つしない、緊張した雰囲気の中で、この儀式が行われたんです。私は、これこそ東国仏教の盛行を示す大イベントであった。そんなふうに考えております。ですから、この出来事を、あえて、東

国仏教の爛熟を示す、一つのエピソードと申し上げたいんです。

さてこのような、最澄に対する東国民衆の熱烈な帰依、信仰、そして、ある意味では、感動的ともいべき荘厳な授戒会が見事に終了した。そういう仏教への驚異的な関心は、最澄が偉大だったから、この時に生起したんでしょうか、私は、そうは考えないんです。先程申しあげましたように、もうそれ以前に、おそらく、あの最澄の高弟、第2代の天台座主になった円澄が、埼玉に生まれたころ、もう信濃では、このような立派な瓦塔が造られていました。そして埼玉県では、その時期に、東山遺跡の瓦塔が出現しております。このような瓦塔の存在は、あきらかに、東国に、すでに民衆レベルで、十分仏教が育っていたということを示唆しておるわけでございます。そういった東国の仏教を、最澄の説く、法華經の教えと連動させた人が、私は道忠だったと考えております。

道忠は、先程申しあげました、東国を中心にして、「梵網戒」という教えを説いておりました。これは、鑑真和上によって説かれたものでございます。この教えを東国で説いた道忠は、そのために民衆に慕われて、「東国化主」、東国の生き仏と称され、道忠を慕う多くの民衆が、彼の周辺に集まっていたんです。この道忠を媒体にして、広智とか、後に天台宗をささえた円澄や円仁、あるいは徳弁といった人たちが育っていたんです。この道忠は、鑑真和上の高弟でありました。鑑真和上は8世紀、奈良時代の中ば頃渡来しました。そして、御存知のように、日本に三つの戒壇を開いております。それぞれの戒壇道場で、僧侶になる資格——授戒を授けたんです。その三つの戒壇の一つ、下野——薬師寺の戒壇は、鑑真の弟子如法が下野に東下して開きましたが、おそらくそういった動きの中で、鑑真和上の高弟、「授戒第一」と称された道忠も東国へ下り、東国で鑑真の教えを広め、「東国化主」と称される声望を得ていたんだろうと思います。そういった下地がありましたから、最澄の講筵に、9万人もの人たちが集まったんでしょう。

9万人というのは、あるいは誇張があるかも知れませんが、もしも、この9万人という民衆が3ヵ月間、緊張した雰囲気の中で、最澄の説教を聞き続けたとすれば、これは大変なことであります。かりに9万人が延べ人数だったとしても、当時の人口を考えてみますと、驚異的な人数といわなければなりません。

私は、奈良時代、北武蔵、埼玉県の人口はだいたい9万人ぐらいだったろうと考えております。もしも、この9万人が事実だったとすれば、おそらく、当時の埼玉県の人口ぐらいの人が緑野寺に三ヶ月間集まって、最澄の講演を聞いた。法華經の教えを聞いたということになります。これは大変なことですね。みなさんもよく御存知のように、吉野ヶ里遺跡、佐賀県の吉野ヶ里遺跡を見学した人は、今年でついに100万人を突破し、120万人を越えたといえます。これは、佐賀県の人口をはるかにオーバーする人数なんです。吉野ヶ里遺跡は、大変すばらしい遺跡でございますが、ちょうど吉野ヶ里遺跡にたくさんの人々が参集したように、最澄の講演には、当時の北武蔵の人口を越える人が、しかも三ヶ月間に集まったことになるわけです。こういった東国の民衆の仏教への驚異的な関心は、おそらく、最澄の東下の時点で、突然生まれたんじゃないくて、その前、すでに、鑑真の法燈を継ぐ、道忠、そして広智といった人たちの布教活動によって、醸成された

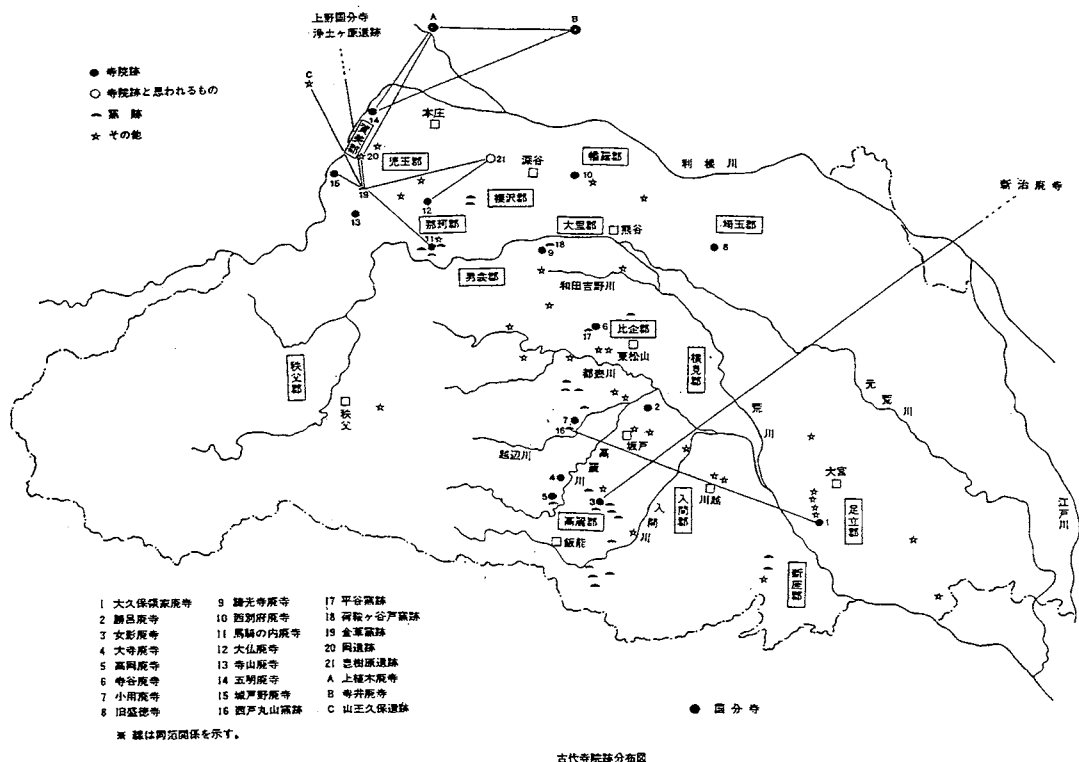
と考えなければ、到底理解できないんじゃないか、と私は思うんです。

それでは、なぜ、道忠の教えが、鑑真和上の「梵網戒」が、それほど東国の人々の心をとらえたのか、私は、これは誰でも仏になれるという、大乘的な教義が当時の民衆の心を打ったからだろうと考えております。

先程、森先生もおっしゃっておられましたが、天平13年に「諸国に国分寺を置く」ことが宣命されて、そしていくつかの紆余曲折がありましたが、やがて国ごとに国分寺、国分寺尼寺が創建されました。現在、発掘調査によって全国的にあきらかにされた諸国の国分寺は、想像以上に壮大な堂宇を持ち、更に、華麗な五重塔、七重塔が建てられていたようです。各国に創建された国分寺、あるいは国分寺尼寺は、まさに奈良時代の国家仏教の隆盛を象徴する巨大な建造物だったと考えていいと思います。しかし、その仏教、国分寺に象徴される仏教は、一部の上層階級、天皇と貴族たちのものでしかなかったんです。先程の話にもありましたが、国分寺の創建に貢献したものは、五位の位を与えられた。そういった恩賞が、国司や創建を督励する人たちの励みになって、創建事業が推進されたでしょう。そして、完成された国分寺には、僧侶や僧尼が派遣され、そこでは、確かに真摯な修行や勉強がおこなわれていたと思いますが、それはあくまで、国家のため、天皇のためであって、営々と農業に励んでいた農民や、また、名もない民衆たちには、まったくかわりのないものだったんです。

鑑真和上と、その法燈を受け継いだ道忠によって、教えられた「梵網戒」は、官人も上層階級も、貴族や農民も同じように仏になれることを保障しておりました。だから、国分寺を中心にした仏教に断差を感じていた農民たちも、この教えには共鳴したんです。そして、これをわが教えとして、熱烈に信仰し、仏になれることを保証した、道忠を「東国化主」、生き仏として敬ったんです。

こういう道忠の教えと、南部布教に反対した最澄の法華経は、まさに教義の根底で相合することになります。ですから、道忠は早くから最澄に関心を示し、最澄のために写経の協力をしておりました。道忠死後も、その弟子広智は、自分の愛弟子を叡山に送り、最澄に修業を託したわけでございます。もちろん、この時期には南部仏教に反対して、新しい民衆仏教を唱えた人は、最澄だけではありません。空海——弘法大師という人もおりました。空海と最澄の法華経をめぐる論争は有名でございます。また東北には徳一という高僧もおりました。徳一が唱く法相宗と最澄の唱く法華経とが激しく対立して、「最澄、徳一論争」といった有名な論争も行われます。まあそんなふうに、東国には予想以上に仏教の芽ばえはあったわけです。しかし、そういった仏教を、東国民衆の仏教としてまとめる、大きな役割を果たしたのは、道忠であった。それが呼び水になって最澄は愛弟子の義真や円澄・円仁、そして、徳円が育った東国に大きな関心を持ち、道忠の教化の実態にもふれようとして東下したんでしょう。そんなふうに考えますと、最澄の東下、そして、三ヵ月間の説教に9万人の民衆が集まったという、一大イベントの成功、まさに当時の、東国仏教の爛熟を示す一大事業の成功は、道忠、如法、そして鑑真までさかのぼって考えなければ理解できない。そういうふうに思われてならないのです。



参考図表Ⅷ(金井塚2)

しかし、それでは、そこまでさかのぼればいいのかというと、私はまだ問題があるように思うんです。私は確かに、最澄の東下の成功は、道忠とその門下たちの存在が重要な役割を果たしたと考えます。しかし、東国の仏教はもっと古くさかのぼって考えなければいけないと思っております。そのために天平13年以前、東国には予想以上の寺院が造られていたということを申し上げたいのです。

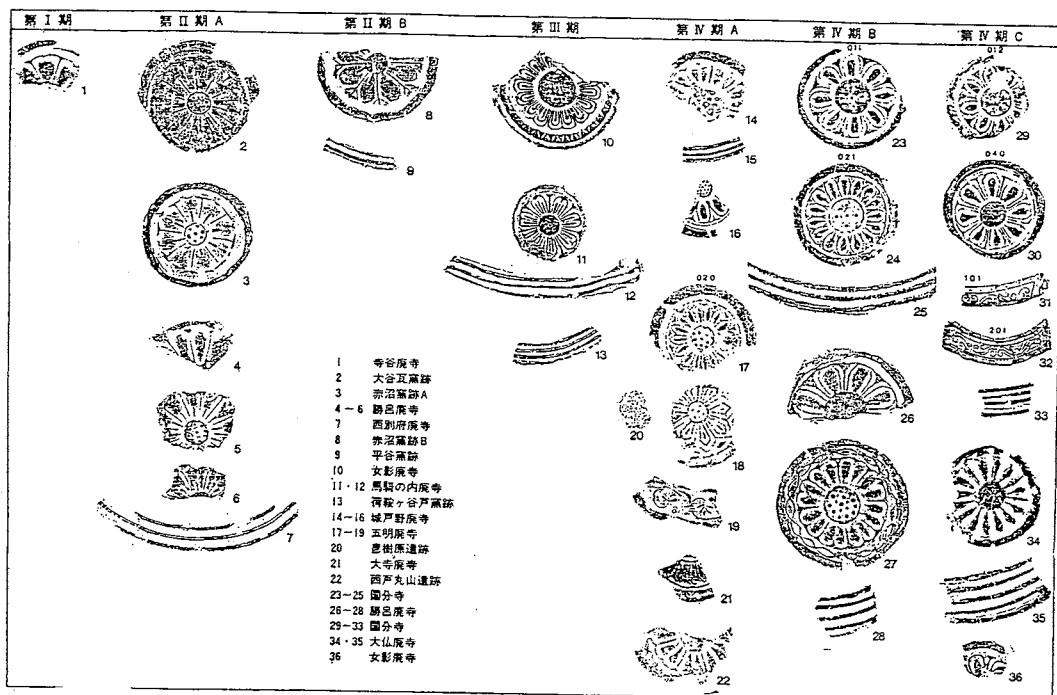
時間がございますので、お渡しした表で説明させていただきますが、東山遺跡から出土しました瓦塔と並んで、ここには、国分寺建立以前の東国の古代寺院を国別にまとめた表(資料2)がございます。これを見ていただきますと、7世紀前半、北武蔵には、先程申し上げました廃寺、寺谷廃寺がすでに造られておりました。ただ、残念なことに今の所、この廃寺の性格は明瞭になってはいないのです。一部の人は、寺谷廃寺以前——6世紀終末には、もう草堂的な寺の存在を考えている人もおります。私も古墳から出土します、銅鏡・水瓶など、仏教的な性格をもった遺物から、6世紀後半には、仏教、もしくは、仏教思想といったものが、東国には伝播していたんじゃないかと考えていますが、しかし、仏教伝播を具体的に知らせてくれるのはお寺でございます。お寺を中心にして考える限り、今の所7世紀前半の仏教伝播の証拠は寺谷廃寺だけに限ら

れております。そして、7世紀後半になりますと、常陸を除いた関東各国に18ヶ所の寺が造られてきます。8世紀前半には、29ヶ所に増加しているのです。ということになりますと、推古天皇の2年、594年ですが、「三宝を興隆せしむ」と宣して仏舎を造る、造寺活動を推進させた施策は、遠い東国にもかなり浸透していたと考えていいように思うんです。7世紀の寺は、もちろんまだ村落寺院的なものじゃなく、仏教に関心をもった存地豪族や、また仏教と深くかかわっていた東国に移住した渡来系氏族たちの、氏寺として建立されたと思うんです。その中のいくつかの寺は、あるいは郡寺的な性格をもっていたかもしれません。そして、やがて天平13年、国分寺の創建によって、在地仏教が国家仏教にとりこまれていくにしたがって、在地の造寺活動は一時衰退していくんだろーと思います。そういった動きの中でも、私は、東国の仏教は在地豪族やまた民衆の間に、連綿と維持されていたと思うのです。数は少なくなっても、8世紀の廃寺がそれを伝えておりますし、発掘によって出土する仏教的な遺物が、それを教えていております。このような、東国の民衆の間に信仰されてきた仏教が、8世紀の終りに道忠の「梵網戒」に出合って、一斉に花開いたんでしょう。そうして、あの最澄東下のさいの盛大なイベントの成功を現出させた、そんなふうを考えられてならないんですね。

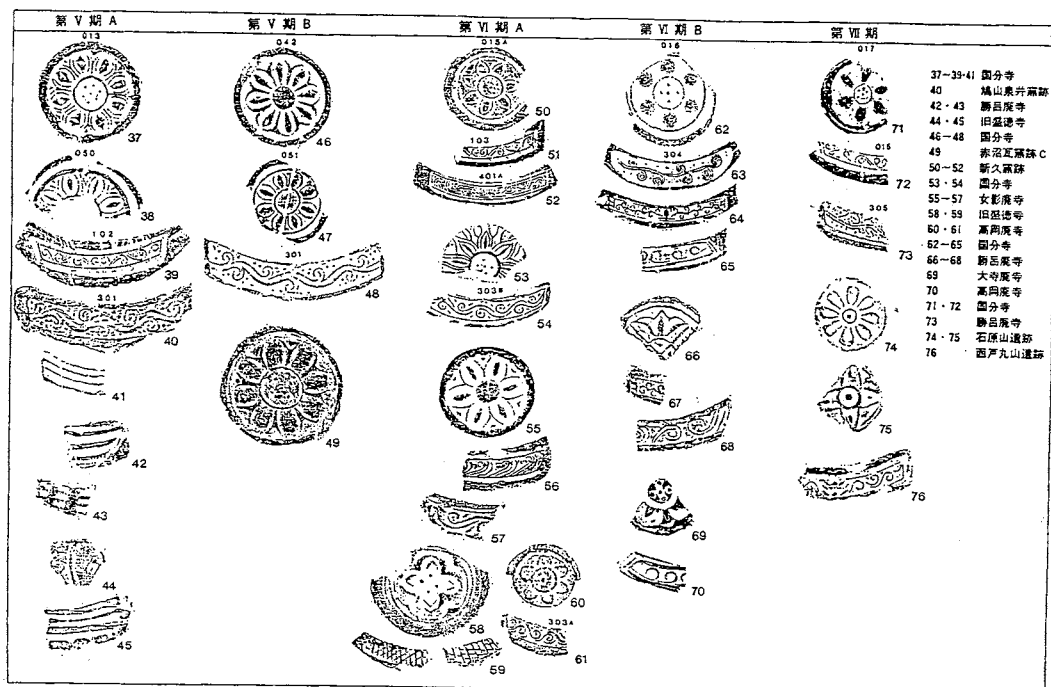
この時期に菖蒲沢の瓦塔をはじめ、東山遺跡の瓦塔などたくさんの瓦塔が、東国で造られました。それらの瓦塔は、あるいは最初は、寺院の中に安置されていたのかもしれませんが、しかし、寺院の中ではなく、村落の中に簡単な鞘堂を造って安置されたような事例もたくさん出ております。森さんがおっしゃったように、五重塔は決して飾り物でなかったんです。信仰の中心だったんです。そういう塔を、深く仏教に帰依した、仏教に感化した東国の民衆が、村落内に安置して祀った施設を造っても決して不思議ではないように思うんです。最近、若い研究者の中から、村落内寺院の存在が、発掘調査の成果を中心に主張されはじめてきておりますが、私はそうした村落内寺院の問題は、このような瓦塔の在り方からも、十分考えてみる必要があるように思っております。

このように考えてまいりますと、菖蒲沢の瓦塔をはじめ、東国に出現したたくさんの瓦塔は、平安時代と、またそれ以前の、東国の仏教の実態をわれわれに具体的に教えてくれるきわめて貴重な資料であったと考えなければならなくなります。これから、われわれはこれらの瓦塔を手がかりにして、東国の仏教と真正面から取りくんで、奈良時代から平安時代——律令時代とその崩壊期の東国仏教の内容と性格を明らかにしていく必要があるように思います。これは、あるいは菖蒲沢の瓦塔が、われわれに投げかけた最も重要な問題提起とっていいかも知れません。

以上で終らせていただきます。失礼いたしました。



北武蔵古代瓦葺年表 1



北武蔵古代瓦葺年表 2

参考図表 IX (金井塚 3)